

### 三 底を究めて奥に届いて

佛の教の眞髓を得たる者、如來招喚の御聲に徹底せし人、之を名づけて信心獲得の行者となす。人を信ずるならば飽迄之を信じ、信じ信じて亦何等の疑慮なく、全人格を打込んで、至誠を他の胸中に置く、絶対の信は茲に成立すべし。人を疑ふならば飽迄之を疑ひ、疑ひ疑うて疑の及ぶ限り疑へよ、最後に如來の光明は來らん。疑ひ疑ひ、疑ひ盡して、終に疑ふ能はざるに至りて、如來を信じ、友を信じ、親を信じ、人を信じ、世を信ずるに至るであらう。信ずるでもなく、疑ふでもなき不徹底の取扱ほど、自ら損し他を害することの甚しきものはない。

自ら信ぜば飽くまで之を信じ、自ら疑へば飽くまで疑へ。信仰上の問題は生命の問題である、血の滴る問題である、淫漑たる脈の顫動があらねばならぬ。信仰は思ひつきでもない、思想でもない、概念でもない、希望でもない、言葉でもない。故に耳に聞いて合點しても駄目である、成程と思ふても駄目である、左様に違ないと思ふても駄目である、生命は生命によりて、血は血によつてゝなくては、解るものでありませぬ。他力の信心といへば、親鸞聖人が二十年の御苦勞の跡を思ひ、念佛といへば、法然上人が三十年の御苦心の跡を偲び、御恩・御慈悲・本願・名號・他力・救濟、此等の一語毎に、如來の五劫の思惟も、永劫の修行も、封じこめられてあることを、本當に底を究めて味ひ、心と心、血と血、命と命と、觸れ合ひ融け合うて、唯尊さに涙こぼるゝの境に徹到せねばならぬ。

一體に、佛の事は疑はるゝのが本當である。始めから疑はぬなどゝ云ふのは、まだ大事がかゝらぬからである。本當に大事がかゝつたら、疑ふのが當然である。「疑へば則ち華開けず、信心清淨なれば華開いて、則ち佛を見た

てまつる」と云ふ。清淨なる信心の華は、眞實如來の實意に打たれて、疑の消え去つた時開くのではなからうか。泥の中から生へぬ蓮華は、根據のない生命を失つた造化に過ぎないのである。

或山寺の和尚、里から一人の弟子を入れて、小僧にして召使つてゐた。ところが此の小僧、或る時里へ逃げ歸つて、親に云ふには、「折角寺へ赴きました上からは、何とかして學問を勵み、出家を遂げたいものと思つて、今迄は随分と堪忍いたしました。主の坊があんまり無理な事を申され、折檻されますから、堪へられなくなつて歸つて來ました」と云ふ。両親は之を聞いて「それはまたどんな迷惑か」と聞けば「常々とても尤もだと思つた事はありませぬが、中で特に迷惑に思ふことが三箇條ございます。第一、寢てはならぬと叱られます。第二、誰も勝手の仕手はないのに、味噌を摺つてはならぬ味噌の摺り様が悪いと怒られます。それはまだしも、第三には、用を達しに雪隠に行きますと、又雪隠へ行くか、心得違をして居るといつて折檻せられます。一つならず三つまで、常々斯様でござりますが、こんな事で一生勤まりませうか」との答。「何、それは以ての外の次第、いくら弟子にとつたからと云つて、あまりと云へばあまり、一刻も捨て置かれぬ」と、煮えくりかへる腹を引提げて、親爺早速寺へかけつけ、住持に遇つて、散々不足をならべ小僧を取返さうとする。

直接我身の上ならぬ子供のことはいへ、我が身以上に腹にこたへたものが見える。我子可愛いのは、ひいて師匠を疑ひ惡むに至つたのである。此の心はやがて彼を解決に導く。

和尚は言葉をやはらげ、「マアくそんなに怒らぬでも、事の次第を聞いて下さつたら解ること。」それでも生きてる者に、寢るなどは如何でござん、

何と無理ではござらぬか。「それはサア、僧が頭を剃ることは、誰も自分で致すことで、一々他人を頼むことは出来ませぬ。夫故あの子には、先づ私が頭を貸してやり、剃る稽古をさせて来たので、今は小僧自身が自分の頭を剃ることが出来るやうになりました。然るに私の頭を剃る時に限つて、居眠をして剃刀を使ひ外し、私の頭を枕にグウク寝て仕舞ひますから、それ寝てはならぬと、云つたのである。「左様でございませるか、それでは小僧の方が悪い。それを兎や角と申す私も悪い、が併し、味噌を摺るなどは何事でござる」。「それもサア、いづこも同じ、味噌に客用と普通のとがある、それをあの小僧、いつも上等の分を出して、而も杓子で摺ります。それで、その方の味噌を摺つてはならぬと言ひ聞かせるのです」。「へいそれも解りました。然らば雪隠に行くなどは何事でござる、食べるのに出さずには居られますまい」。「それもお客用と勝手向と両方ありまして、お客用には誰も行きませぬのに、あの小僧一人、自分のものにして行き、時に汚しますから、其方へ行つてはならぬ、と堅く申付けた次第です」。「成程、それですつかり解りました、すべて私の子供が悪うございました、それを怒る私も濟まない、こんな腕白者を親切に御世話下さる御師匠、誠に有難うございます、何分にもよろしく」と、お詫や御禮の百萬遍を述べて歸つたとや。

聞かねば事情が解らぬ。一段の不審をも立て、法門の沙汰をする處に、自分の淺間しさが知れて、成程此身ゆゑの御慈悲と、ぞつこん一致することが出来る。親爺が寺へ怒鳴込んだ如く、生死問題について如來の御前に怒鳴込め、すれば御恩のほども我身に知られて、有難さに涙こぼるゝの境に達せられる。親爺は和尚を責むるよりも、由來を聞いて、先づ我身の迂闊を責めねばならぬことになり、同時に和尚に感謝せねばならぬことになった。御慈

悲<sup>ひ</sup>を胸<sup>むね</sup>に徹底<sup>てつてい</sup>せしめよ。